

生活科における社会に働きかける力の育成を目指す
教材の開発：
創造的な思考を促す活動の分析を通じて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磯山, 恭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024662

生活科における社会に働きかける力の育成を目指す教材の開発

—創造的な思考を促す活動の分析を通じて—

磯山 恭子

Development of Teaching Materials for Fostering Social Competence in Living Environment Studies: Analyzing the Learning Activities to Encourage Creative Thinking

Kyoko ISOYAMA

Abstract

The purpose of this research is to examine the possibility of living environment studies teaching materials aiming to foster the social competence by analyzing the learning activities to encourage creative thinking in living environment studies. This research analyzes the process of fostering the social competence through practicing the lesson that utilize "Warashibe Activities". The results of this research are as follows. Firstly, by conducting learning activities to encourage creative thinking in living environment studies, it is possible to foster the foundation of the social competence. Secondly, there are the principles in the process of fostering the social competence in living environment studies. Thirdly, in living environment studies, learning activities to encourage creative thinking are effective for forming the abilities as bases of creative thinking. Especially, learning activities to encourage creative thinking influences the ability of understanding others and the ability of exploring gap.

キーワード：生活科 社会に働きかける力 社会の変化 創造的な思考 企業家精神 価値 交換 交流

1. 問題の所在

本小論の目的は、生活科における創造的な思考を促す活動の分析を通じて、社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材の可能性を明らかにすることである。具体的には、静岡大学教育学部の生活科教育法を受講する学生を対象に、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業を実践する。さらに、本授業の実践から得られた成果をもとに社会に働きかける力の育成の過程を分析する。

近年、日本では、グローバル化、少子高齢化、情報化をはじめとする様々な社会の変化と、それに伴う社会の構造の変革が、急速に進展しつつある。このような社会の変化は、子どもの関わる人々、自然および社会の多様化を促進する。そのため、必然的に、子どもの出会う社会や生活経験に、大きな質的な変容をもたらすこととなる。

今後はますます、子どもが、様々な未知の生活事象への気づきを自覚し、新たに出会う社会や生活経験に対応し、より良い社会や生活をつくるために主体的に社会に働きかける力の基礎を発揮することが求められている。本小論では、このような力の総体を、社会に働きかける力と仮説的に定義する。

1989年に成立した生活科は、よき生活者の育成に重要な役割を担ってきた。成立当初から、生活科は、よき生活者として求められる子どもの能力および態度の育成の視点に基づき、内容構成がなされてきた。

静岡大学教育学部社会科教育講座

このような生活科の教科の特性のもとで、具体的な子どもの活動や体験を取り入れた生活科の授業実践に関する研究が、これまで数多く蓄積されてきており、一定の成果を収めてきたと評価されよう。しかしながら、生活科の能力観に関する研究や、よき生活者として求められる子どもの能力および態度の育成論に関する研究は、一層充実が求められる現状であろう。

先述した社会の変化による子どもの出会う社会や生活経験の質的な変容を捉えながら、生活科において、次の二つの教育課題への対応が重要であると考ええる。

すなわち、まず第一に、生活科の授業の実践に基づき、このようなよき生活者として求められる子どもの能力および態度の内実を解明することである。

第二に、子どもの出会う社会や生活経験の質的な変容を受けて、新たに必要となる子どもの能力および態度の育成の方法論を考究することである。

そのため、創造的な思考を促す活動を通じて、社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を提案する本小論の試みには、大きな意味があると考ええる。

本小論では、次の四つの課題を設定する。

すなわち、まず第一に、近年の生活科の動向から、生活科における社会に働きかける力の基礎の育成の基本的な位置を示す。

第二に、従来の生活科に関する代表的な研究をもとに、社会に働きかける力の能力観の意味を考察する。

第三に、創造的な思考を促す活動を通じて、社会に

働きかける力の育成を目指す生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を構想する。

さらに、第四に、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業の実践をもとに、生活科における社会に働きかける力の育成の過程を分析する。その際、企業家精神（entrepreneurship）の基本的な思想を視点とする。企業家精神とは、「すでに行っていることを上手に行うことよりも、まったく新しいことを行うことに価値を見出す」¹⁾行動であると定義される。

2. 生活科における社会に働きかける力の育成の位置

2017年版小学校学習指導要領では、幼稚園から高等学校まで、育成を目指す資質・能力の視点から、全ての教科の教科の目標及び内容が再構成された²⁾。育成を目指す資質・能力とは、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等といった三つの柱を指している。

2017年版小学校生活科学習指導要領の教科の目標は、次の通りである³⁾。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1)活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2)身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3)身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

生活科の教科の目標には、生活科の究極の目標と、生活科で育成を目指す資質・能力が提示されている。

生活科の究極の目標は、具体的な活動や体験を行うこと、身近な生活に関わる見方・考え方を活用すること、自立し生活を豊かにしていく姿が現れることといった三つの要素から成り立っている。

生活科で育成を目指す資質・能力は、先述した知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等といった三つの柱のもとで、これらの基礎として整理された。

生活科の知識の基礎とは、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等への気づきである。生活科の技能の基礎とは、生活上必要な習慣や技能である。

生活科の思考力・判断力・表現力等の基礎とは、生活科の見方を活用して、生活事象を考える方法に当たる身近な人々、社会及び自然と自分との関わりとの把握である。さらに、2017年版小学校生活科学習指導要

領の内容の取扱い(3)では、「具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えることができるようにするため、見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫するなどの多様な学習活動を行うようにすること。」としている。子どもに、従来の見付ける、比べる、たとえるといった分析的な思考に加えて、試す、見通す、工夫するといった創造的な思考を促す多様な学習活動の充実が求められている。

生活科の学びに向かう力・人間性等の基礎とは、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかける意識や能力の形成と、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度である。

社会に働きかける力の育成の視点に基づき、2017年版小学校生活科学習指導要領の教科の目標には、次の二つの要点が整理されると考える。

すなわち、まず第一に、社会及び自然と自分との関わりとの把握では、子どもに、創造的な思考を促す多様な学習活動の展開が求められていることである。

第二に、生活科の活動を通じて、社会及び自然に自ら働きかける意識や能力の育成を目指す授業の組織化が求められていることである。

従って、近年の生活科の新たな教育課題として、創造的な思考を促す活動を通じて、社会に働きかける力の基礎を育成することが注目されることがわかる。

3. 生活科における社会に働きかける力の育成の意味

(1)生活科における社会に働きかける力の育成の展開

生活科における社会と自分との関わりとの活動に関する研究として、木村光男、加納誠司および峯岸由治による代表的な研究を挙げることができる⁴⁾。

木村光男は、社会と自分との関わりとの活動の過程から、生活科で育成を目指す資質・能力の解明を試みる。その中で、直接体験に基づく概念の獲得や知的能力の形成の重要性を指摘している⁵⁾。

具体的には、小学校第2学年を対象とする生活科単元「まちたんけん」「ぐんぐんそだてふゆやさい」「わたしのしごと、みんなのしごと」を事例として、分析を行っている。これらの分析から、直接体験に基づく探究活動の過程で、子どもが「コミュニケーションを図りながら、体験を協同的に振り返ること」⁶⁾で、子どもの知的能力の育成が可能であることを示した。

加納誠司は、生活科と社会科との連続性を見通して、社会的な見方・考え方の形成を捉えている。生活科において、科学＝理科学的な見方・考え方の基礎を育成する視点に基づく授業の質的な充実が見られるのに対して、社会的な見方・考え方の基礎を育成する視点に基づく授業への意識があまり見られないことを指摘している⁷⁾。生活科から社会科の社会的な見方・考え方につながる視点として、空間認識、地域への愛着および自己実現の三つを挙げている。

具体的には、小学校第2学年を対象とする生活科単元「地域と生活」「公共物や公共施設の利用」を事例として、分析を行っている。これらの分析から、生活科において、社会的な見方・考え方の基礎を育成するためには、複合的な単元構成、人との交流が重要であることを示した⁸⁾。

峯岸由治は、生活科の活動における社会科学的な認識に基づく気づきの意味を提案している。生活科の知識の基礎である気づきの概念の明確化のために、自然や社会に対する科学的な認識の形成を意図した生活科の授業の価値を指摘している⁹⁾。中でも、新たな生活科の内容として、「労働におけるもののつながり」の生活科の授業に注目している。

具体的には、小学校第2学年を対象とする生活科単元「ぶどうものがたり」を事例として、社会的物質代謝の視点に基づき、分析を行っている。これらの分析から、「労働におけるもののつながり」の生活科の授業が、「社会的物質代謝における生産労働行為だけでなく生活文化創造行為を視野に入れ」、社会的物質代謝に基づく具体的な活動や体験を総合的に組織する可能性をもつことを示した¹⁰⁾。

木村光男、加納誠司および峯岸由治による代表的な生活科における社会と自分との関わりの活動に関する研究から、社会に働きかける力の育成には、次の三つの条件が重要であると判断できる。

すなわち、まず第一に、直接体験に基づく探究活動の過程を設定することである。

第二に、社会的な見方・考え方の基礎を育成する視点に基づく授業を組織することである。

さらに第三に、生活科の知識の基礎である気づきを明確化するために、社会科学的な認識の形成の視点から、新たな生活科の活動を構成することである。

(2) 生活科における社会に働きかける力の特色

生活科で育成を目指す力は、「感性をみがく」「認識力・判断力をみがく」「生活技能をみがく」「たくましさ育てる」の四つが基本になるとされる¹¹⁾。

須本良夫は、先駆的な社会に働きかける力の育成に関する研究を行っている¹²⁾。須本良夫は、自立への基礎の育成を究極の目標とする生活科では、生活科の活動を通じて社会力を育成することが重要であると指摘している¹³⁾。門脇厚司の定義した社会力とは、「社会のある種の状態のことをいうのではなく、主体的に、好ましい社会を構想し、作り、運営し、改革していく意図と能力と、そのための日常的な活動を含めた意味¹⁴⁾とされる。須本良夫は、生活科において育成すべき社会力の基礎を、「子どもが自分たちの力でより良い家庭や学校生活、地域社会をつくりあげていくために必要な能力や意欲」と捉えている¹⁵⁾。

具体的には、小学校第1学年の生活科単元「すなで

あそぼう」を事例として、分析を行っている。社会力の育成を目指す生活科の授業では、「自分自身や対象へのこだわりをもつこと」「遊びの活動の中には、競争場面を仕組むこと」「単元全体の見通しを持つこと」¹⁶⁾が有効であることを示した。

この社会力の基礎は、社会に働きかける力の基礎に通じるものである。その一方で、社会に働きかける力の内実とは、まだまだ明確にされていない。先述した通り、生活科において、創造的な思考を促す活動を通じて、社会に働きかける力の基礎を育成することが求められている。創造的な思考を促す活動を通じて、社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材を構想するためには、社会に働きかける力の内実を、一層具体的に考察する必要がある。

坂口淳他は、子どもの生活環境と創造力への国民の関心の実態を解明するアンケート調査を行っている¹⁷⁾。本調査から、現代の子どもの創造的な思考の一端を垣間見ることができる。

本調査では、現代の子どもの創造力が、より高いとの回答が全体の17.2%であるのに対して、より低いとの回答が全体の43%であったとされる¹⁸⁾。さらに、教育、言葉、社会、情報、物質文明、その他の観点から、子どもの創造力の低下の理由を分類している。その結果、教育では「工夫して遊ぶことが少ない」「学校教育」、言葉では「活字ばなれ」、社会では「子どもに時間がない、創造力を養う環境がない」、情報では「テレビ、パソコン、ビデオゲームの影響」「情報の氾濫」、物質文明では「ものであふれている社会」が、上位の考えに挙げられている¹⁹⁾。

本調査から、子どもの出会う社会や生活経験では、創造力の育成に課題がある実態が浮き彫りとなってくる。そのため、学校や社会における創造力の育成を目指す教育環境の充実が求められることがわかる。

さらに、子どものみならず、教員や教員を目指す学生自身に社会に働きかける力を育成することも重要である。

教員に求められる社会的能力を育成するプログラム“Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Teachers”（「教師のための8つの社会的能力育成をめざした社会性と情動の学習」）²⁰⁾の提案は、興味深い。この社会的能力は、子どもと教員を区別することなく共通して必要であるとされている。

具体的には、社会的能力は、「自己への気づき」「他者への気づき」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」の五つの基礎的な社会的能力と、「生活上の問題防止のスキル」「人生の重要事態に対処する能力」「積極的・貢献的な奉仕活動」の三つの応用的な社会的能力によって、構造化されている²¹⁾。

4. 社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材の 構想－「わらしべ〇〇になろう」の場合－

(1) 社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材の 概要

創造的な思考を促す活動として、社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を構想する。その際、シーリグ、ティナ(Seelig, Tina)によるスタンフォード大学の「どんな問題もチャンスと捉え、工夫して解決できること」を目標とする講座を手がかりとする²²⁾。具体的には、「スタンフォードの学生売ります」の先行授業実践²³⁾に着目した。

シーリグ、ティナによる先行授業実践²⁴⁾では、学生に10個のクリップを与え、「これから5日間、封筒を開けてから4時間のあいだに、このクリップを使って、できるだけ多くの『価値』を生み出してください。」²⁵⁾と課題を設定する。この課題の成果を、「チャンスは無限にあること」「問題の大きさに関係なく、今ある資源を使って、それを解決する独創的な方法はつねに存在するということ」「往々にして問題を狭く考えすぎていること、一步引いて、広い観点から見ること」の四つに整理している²⁶⁾。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」は、日本の昔話である「わらしべ長者」²⁷⁾をモチーフにしている。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の趣旨は、人と出会い、会話し、交流し、体験することによって、何か価値のあるものと交換していく活動である。最初のを、最終的により良い価値のある〇〇に変えていく試みである。生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の目標は、人と人、人と自然、人と社会が関わり合う中で、より良い未来を創造し世界を変える夢のあふれる活動を目指している。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の内容および方法は、具体的には、次の四つである。

①テーマを決めて、活動計画を立てる。

テーマのもとで、目的と方法、最終的に変える予定の〇〇の予想、どのような作品に仕上げるかをしっかり考える。資料や情報を収集し、方法を検討したり、価値のあるものの背景や意味を調査する。

②さあ挑戦しよう！前へ進もう！！

人と出会い、会話し、交流し、体験することによって、何か価値のあるものと交換していく。最終的にまとめるために、データを収集し、記録することを怠らない。

③活動を分析し、まとめる。

人に伝わるようにまとめる工夫を考え、一連の活動から得られたデータをもとにまとめる。

④発表する。

発表時間は13分で、人によりリアルに伝わるように工夫して、わかりやすくドラマチックに楽しく発表する。その際、自分たちが活動を通じて行った体験を、みんなで共有できるように考える。「わらしべ〇〇になろう」の一連の活動から得られたデータを効果的に使用する。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の内容および方法は、テーマと活動計画の決定、行動、活動の分析とまとめ、発表の段階で構成される。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動は、次の通り展開される。

- ①最初のものは、100個程度あるため、必ず少なくとも2つ以上に分けて、交換を開始する。わらしべ〇〇の活動場面は、10段階以上行う。
- ②違法な行為、倫理的に問題のある行為、危険な行為、迷惑な行為は絶対してはいけない。(例えば、価値が1円に満たないクリップをそのままの状態で高額な値段で売るとか、かけによって大金を得ようとするなど。)
- ③人と人、人と自然、人と社会が関わり合う中で、より良い未来を創造し世界を変える夢のあふれる活動計画を立てる。
- ④「人と出会い、会話し、交流し、体験することによって、何か価値のあるものと交換していく」活動は、直接の体験に限る。
- ⑤全てを使い切る。全てを失ったら、各グループで同じものを同じ数だけ購入し、もう一度最初からやり直す。わらしべ〇〇の活動によって得た何か価値あるものは、捨てたり無駄にすることはできない。
- ⑥わらしべ〇〇によって、最初のものの価値をより良いものに高めながら、活動の目的を達成する。その際、最初のは、必ず違うものに変化させる。活動の目的を達成するための交換はできない。
- ⑦三親等以内の人、同じクラスの人とのわらしべ〇〇は禁止である。
- ⑧必ず静岡大学以外の場所でも、複数段階、わらしべ〇〇を行う。
- ⑨わらしべ〇〇の活動の目的を達成するための工夫や加工が大切なので、金銭以外の方法を利用して、よく考えて活動する。加工するための経費は、2000円までとし、必ずグループ全員で平等に負担する。ただし、移動のための交通費やインターネット費などの間接経費は除く。
- ⑩わらしべ〇〇の途中で、金銭と交換することはできるが、そのお金で何かを購入することはできない。
- ⑪わらしべ〇〇は、必ず3人以上のチームで行う。個人で活動することはできない。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動は、①～⑥「わらしべ〇〇になろう」の活動の本質、⑦⑧大学、地域、社会の多様な人々と自分との関わり、⑨⑩生活上必要な習慣や技能、⑪コミュニケーションとチームワークの観点を取り入れている。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動で使用する主な材料は、大体100個で100円のものを準備した。具体的には、次の通りである。

クリップ 輪ゴム ストロー 封筒 わりばし 折り紙
スパンコール 半紙 カード ビニール袋 つまようじ
紙コップ 布(100cm) マドラー 紐 種 タイ 毛糸
バンドエイド 綿棒 シール リボン

シーリーグ、ティナによる先行授業実践²⁸⁾に対して、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動では、次の三つの改善を行っている。

すなわち、まず第一に、単に価値を生み出すだけではなく、加工、交換、連続の行為を行うことである。身近な人々、社会及び自然を自分との関わりの場面を増やす工夫を行う。

第二に、より良い未来を創造し世界を変える夢のあふれる活動という目的を明確にもつことである。創造的な思考を促す活動を通じて、社会に働きかける意味を意識する方法を用いる。

さらに、第三に、活動で使用する材料には、大量で安価な日常生活用品を複数準備することある。身近な生活で気づいていない価値の存在への関心を高め、多様な活動を展開する。

(2) 社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材を活用する授業の指導計画

静岡大学教育学部の生活科教育法は、半期2単位で設定される。生活科教育法の目標は、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりのテーマのもとで、活動を通して、生活科の背景や生活科の志向する新たな学校教育や授業実践の課題を考察することである。

生活科教育法の概要は、クラス全体のテーマに応じて、各グループで個別のテーマを設定して活動を行い、クラス全体でその成果を発表する。その際、クラス全体のテーマは、社会と自分との関わりと自然と自分との関わりの二つに取り組む。各グループの個別の活動の条件は、なるべく独創的なテーマを考えること、具体的な活動や体験を必ず行うこと、人々、社会、自然と関わること、効果的な発表を行うことの四つである。さらに、これらの活動と成果を踏まえて、生活科の教科の特色を理解する。

社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業は、半期の約3ヶ月の期間で主体的に活動を行い、調べて、まとめて、発表する。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業の指導計画は、表1の通りに構成される。

表1 生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業の指導計画

回	授業の内容
第1回	テーマ設定 テーマを考えよう
第2回	中間発表会 予告PRをしよう
第3回	まとめ① クラスで発表をつなげよう
第4回	まとめ② グループの発表を準備しよう
第5回	成果発表会①
第6回	成果発表会②

第1回「テーマ設定」では、先述した生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の趣旨、目標、内容および方法、活動を説明する。人々と関わり合う価値を把握するために、CDで「わらしべ長者」の語りを聞き、映画『ペイ・フォワード』²⁹⁾で描かれる社会科授業の場面を視聴する。「わらしべ長者」から、価値を変化させる行動への意欲を高める。映画『ペイフォワード』で描かれる社会科授業の場面から、世界を変えるための行動をするといった企業家精神の意味を知る。これらを踏まえて、各グループで具体的な個別のテーマを設定し、活動計画を立てる。実際の「わらしべ〇〇になろう」の活動は主体的に取り組むよう促し、第2回までに、最低1回は活動を行うようにする。

第2回「中間発表会」では、ポスターセッションで、各グループで取り組んでいるテーマの意味や面白さを、クラスで伝え合う。中間発表会では、発表を聞く人に「次どうなったか」予想させる質問をすることといった参加型の手法の工夫を取り入れた発表を行う。発表を聞く人は、自分自身のグループのテーマとの関連を意識しながら発表を聞き、気づいたことや考えたことをコメントカードに記入し、クラス全体で交流を図る。クラスの一人ひとりが、発表の良かったグループを二つ選択し、各グループの発表の評価を行う。

第3回「まとめ①」では、中間発表会を踏まえて、クラスで行っている各グループの活動の関連性を考える。価値、交流、つながり、交換・加工するもの、目指す変化の気づきから、各グループの活動の特色を考える。価値とは、ものの価値、価値の変化、人々の価値観の相違である。交流とは、人々とのコミュニケーション、人々との関わりである。つながりとは、活動や行動の継続性、人々、ものの連続性である。交換・加工するものとは、使用する主な材料の特質、その材料を加工するために必要な工夫である。目指す変化とは、変化するもの、最終的な変化やそれまでのプロセスの予測である。

第4回「まとめ②」では、成果発表会に向けて、当日の発表のために、ICTの機器をはじめ準備を行う。

第5回、第6回「成果発表会①～②」では、各グループで「わらしべ〇〇になろう」の活動の成果を発表する。各グループの発表を踏まえて、発表の魅力、発表の工夫、発表の内容、協力の体制の観点から、クラスで評価を行う。自分自身の「わらしべ〇〇になろう」の活動を振り返って、自分がやったことをもとに自己評価を行う。

5. 生活科における社会に働きかける力の育成の過程の分析

(1) 社会に働きかける力の育成を目指す生活科教材を活用する授業の実際

ここでは、2013 年度から 2016 年度にわたって実践した生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業をもとに、考察を行う。とりわけ、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の開始時と終了後の学生の気づきの変容に注目する。

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業を受講した学生数は、2013 年度には全 105 名 13 グループ、2014 年度には全 102 名 12 グループ、2015 年度には全 96 名 12 グループ、2016 年度には全 103 名 12 グループであった。

表 2 の通り、2013 年度から 2016 年度の学生の設定したテーマをもとに、「わらしべ〇〇になろう」の活動の開始時に重視する気づきに応じて、事例数を整理した。先述した通り、ここでの気づきとは、価値、交流、つながり、交換・加工するもの、目指す変化である。

表 2 活動の開始時に重視する気づきの事例数

気づき	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	事例数
価値	0	2	0	3	5
交流	3	2	2	0	7
つながり	4	2	6	3	15
交換・加工するもの	3	1	3	3	10
目指す変化	3	5	1	3	12
事例数	13	12	12	12	49

表 2 によれば、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の開始時のテーマは、全部で 49 事例である。これらのうち、気づきの事例数の上位から順に、つながりは 15 事例、目指す変化は 12 事例、交換・加工するものは 10 事例、交流は 7 事例、価値は 5 事例であった。生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の開始時、学生は、つながり、目指す変化、交換・加工するものへの気づきを強く意識する傾向がわかる。

各年度の内訳では、学生の重視する気づきは、いずれの年度もある程度バランス良く分布している。従って、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動では、学生の興味・関心のもとで、多様な気づきを生み出すことが可能であると言える。

表 3 の通り、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の開始時に重視する気づきに応じて、使用する主な材料を整理し、相互の関係を分析した。

表 3 活動の開始時に重視する気づきと使用する主な材料との関係

気づき	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
価値		折り紙 布		半紙 クリップ ビニール袋
交流	半紙 わりばし つまようじ	スパンコール 輪ゴム	リボン 輪ゴム	
つながり	クリップ 折り紙 封筒 輪ゴム	ストロー つまようじ	わりばし ストロー つまようじ 折り紙 封筒 ひも	折り紙 タイ 毛糸
交換・加工するもの	ビニール袋 シール 種	バンドエイド	バンドエイド 綿棒 紙コップ	スパンコール ストロー 紙コップ
目指す変化	ストロー 布 スパンコール	封筒 わりばし 綿棒 種 シール	布	カード 布 わりばし

*□は特徴のある使用する主な材料。

表 3 によれば、全体として、学生の重視する気づきと、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動で使用する主な材料には、あまり相関が見られない。一方で、折り紙と布という特定の使用する主な材料には、一定の特徴があると判断できる。

折り紙は、2013 年度から 2016 年度の四度の実践全てで選択された。四度の実践のうち、三度の実践でつながりへの気づき、一度の実践で価値への気づきと関連づけられていた。布は、2013 年度から 2016 年度の四度の実践全てで選択された。四度の実践のうち、三度の実践で目指す変化への気づき、一度の実践で価値への気づきと関連づけられていた。

折り紙は、想起される作業が比較的限定しやすく、活動や行動の継続性の見通しが立てやすい。布は、すぐ加工や交換ができないため、加工への試行錯誤がなされやすい。このように、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動で使用する主な材料のもつ特性が、学生の重視する気づきに影響することも想定される。

表 4 の通り、2013 年度から 2016 年度の学生の振り返りのレポートをもとに、「わらしべ〇〇になろう」活動の終了後に重視する気づきに応じて、事例数を整理した。

表4 活動の終了後に重視する気づきの事例数

気づき	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	事例数
価値	6	4	4	6	20
交流	4	2	1	2	9
つながり	2	4	6	2	14
交換・加工 するもの	1	0	0	0	1
目指す変化	0	1	1	2	4
事例数	13	11	12	12	48

表4によれば、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の終了後の振り返りは、全部で48事例である。これらのうち、気づきの事例数の上位から順に、価値は20事例、つながりは14事例、交流は9事例、目指す変化は4事例、交換・加工するものは1事例であった。生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の終了後、学生は、価値、つながり、交流への気づきに実感を持ち、深く洞察する傾向がわかる。

各年度の内訳では、学生の重視する気づきは、いずれの年度も全体の事例数と同様の傾向となっている。従って、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動を経て、価値、つながり、交流への気づきに変容することがわかる。

表5の通り、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の終了後に重視する気づきに応じて、使用する主な材料を整理し、相互の関係を分析した。

表5 活動の終了時に重視する気づきと使用する主な材料との関係

気づき	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
価値	布 半紙 種 つまようじ 封筒 スパコール	綿棒 封筒 輪ゴム 布	ひも バンドエイド わりばし 綿棒	半紙 紙コップ 毛糸 ビニール袋 クリップ スパコール
交流	ストロー 折り紙 わりばし シール	ストロー 種	輪ゴム	ストロー 折り紙
つながり	クリップ 輪ゴム	つまようじ バンドエイド スパコール 折り紙	封筒 ストロー 紙コップ つまようじ 折り紙 リボン	タイ 布
交換・加工 するもの	ビニール袋			
目指す変化		わりばし	布	カード わりばし

* □は特徴のある使用する主な材料。

表5によれば、全体として、学生の重視する気づきと、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動で使用する主な材料には、相関がないと言えよう。一方で、ストローという特定の使用する主な材料には、一定の特徴があると判断できる。

ストローは、2013年度から2016年度の四度の実践全てで選択された。表3によれば、「わらしべ〇〇になろう」の活動の開始時には、四度の実践のうち、三度の実践で交流への気づき、一度の実践で目指す変化への気づき、一度の実践で交換・加工するものへの気づきを重視していた。それに対して、表5によれば、活動の終了時には、四度の実践のうち、三度の実践で交流への気づき、一度の実践でつながりへの気づきと関連づけられていた。

ストローは、「わらしべ長者」を意識し、交換そのものを重視しやすいことが推測される。

これらの結果を踏まえて、生活科教材「わらしべ〇〇になろう」の活動の開始時と終了後で、重視する気づきの変容に、一定の原理が見られることがわかる。全体として、創造的な思考を促す活動の開始時に重視する気づきが、つながり、目指す変化、交換・加工するものから、終了後に価値、つながり、交流へと移行する。活動の開始時に重視する気づきがいずれであっても、活動の終了後に重視する気づきは、価値に移行していく傾向が見られる。さらに、活動の開始時に価値への気づきを重視する場合には、活動の終了後もほとんどの事例で価値を重視している。

(2) 社会に働きかける力としての創造的な思考の価値

本小論では、社会に働きかける力を、子どもが、様々な未知の生活事象への気づきを自覚し、新たに出会う社会や生活経験に対応し、より良い社会や生活をつくるために主体的に社会に働きかける力の総体と、仮説的に定義している。

社会に働きかける力の一つとして、経済学や経営学を中心に議論される企業家精神の概念がある。企業家精神の概念の性格から、教育学ではまだあまり定着が見られないものの、キャリア教育や社会科教育をはじめとする学校教育の教育活動においても、企業家精神の基礎を育成する取り組みがなされつつある³⁰⁾。

企業家とは、セイ、J. B. (Say, J. B.) による「経済的な資源を生産性が低いところから高いところへ、収益が小さいところから大きなところへ移す」³¹⁾という言葉に端的に示されると言われる。このことを踏まえて、経営学に関する研究の第一人者であるドラッカー、P. F. (Drucker, P. F.) は、企業家精神とは、「経済活動の本質は現在の資源を将来の期待のために使うこと、すなわち不確実性とリスクにある…。企業家精神とは、個人であれ組織であれ独特の特性をもつ何かである。…意思決定を行うことのできる人なら

ば、学ぶことによって、企業的に行動することも企業家となることもできる。起業家精神とは気質ではなく行動である。」³²⁾と、企業家精神の本質を述べている。

さらに、ドラッカー、P. F. は、「企業家精神とは、すでに行っていることを上手に行うことよりも、まったく新しいことを行うことに価値を見出すことである。企業家は、…変化を探し、変化に対応し、変化を機会として利用する。」³³⁾と定義している。

企業家精神に基づく行動の中核には、イノベーションがあるとされる。イノベーションを提唱する第一人者として著名なシュンペーター、J. A. (Schumpeter, J. A.) は、「経済活動の慣行軌道の変更が経済を発展させる、これが資本主義の発展の源である」³⁴⁾とする。シュンペーター、J. A. のイノベーション論をもとに、丹羽清は、イノベーションを「従来の慣行軌道を離れ新しい軌道に変わることで、すなわち新しい世界の創造である」³⁵⁾と定義する。さらに、イノベーションの本質は、「『従来のものを破壊して新しいものを創り出す』という意味で創造的破壊という特徴をもつ。」³⁶⁾ことであると述べている。

シュンペーター、J. A. は、このようなイノベーションの機会を、企業の組織や産業の部門の内部の事象と企業の組織や産業の部門の外部の事象にわけて、次の七つを提案している³⁷⁾。

すなわち、具体的には、企業の組織や産業の部門の内部の事象では、「予期せぬ成功と失敗を利用すること」「ギャップを探すこと」「ニーズを見つけること」「産業構造の変化を知ること」である。企業の組織や産業の部門の外部の事象では、「人口構造の変化に注目すること」「認識の変化を捉えること」「新しい知識を活用すること」である。

生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の学生の気づきの洞察には、これらの企業家精神の基礎が培われる姿が映し出される。そのため、これらの企業家精神の基本的な思想の視点から、仮説的にはあるが、生活科における社会に働きかける力の中核に、創造的な思考があると考えられる。生活科における創造的な思考は、想定外への対応力、ギャップの探究力、ニーズの発見力、他者の把握力、知識の活用力の五つを基盤とすると捉える。

(3) 生活科における社会に働きかける力の育成の過程の考察

ここでは、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の終了後の学生の振り返りのレポートをもとに、社会に働きかける力の中核となる創造的な思考の視点から、質的に分析する。具体的には、先述した生活科における五つの創造的な思考の基盤となる力の視点に基づき、振り返りの記述の内容を分析する。

表 6 の通り、生活科教材「わらしべ○○になろう」

の活動の終了後に重視する気づきに応じて、創造的な思考の基盤となる力の育成される事例数を整理した。

表 6 創造的な思考の基盤となる力の育成される事例数

創造的な思考 気づき	の想定外への 対応力	のギャップの 探究力	のニーズの 発見力	の他者の 把握力	の知識の 活用力	のべ総数	平均事例 数の
価値	4	18	7	13	4	46	2.3
交流	0	1	2	4	0	7	0.8
つながり	3	4	1	5	3	16	1.1
交換・加工 するもの	0	0	0	1	1	2	2
目指す変化	0	1	0	3	1	5	1.3
のべ総数	7	24	10	26	9	76	1.6

表 6 によれば、全部で 48 事例のうち、のべ総数の上位から順に、他者の把握力は 26 事例、ギャップの探究力は 24 事例、ニーズの発見力は 10 事例、知識の活用力は 9 事例、想定外への対応力は 7 事例であった。このことから、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動では、社会に働きかける力の中核である創造的な思考の基盤となる五つの力の育成を図ることができると考える。中でも、とりわけ、他者の把握力とギャップの探究力の育成に有効であると言える。

表 4 をもとに先述した通り、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の終了後の振り返りのうち、重視する気づきの事例数の上位から順に、価値は 20 事例、つながりは 14 事例、交流は 9 事例、目指す変化は 4 事例、交換・加工するものは 1 事例であった。重視する気づきごとの創造的な思考の基盤となる力の総数の平均から、価値は 2.3 個、つながりは 1.1 個、交流は 0.8 個、目指す変化は 1.3 個、交換・加工するものは 2 個の力の育成を図っていることになる。このことから、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動では、重視する気づきが価値である場合には、複数の創造的な思考の基盤となる力が育成されることがわかる。その一方で、重視する気づきが交流の場合には、創造的な思考の基盤となる力の育成にはあまりつながっていないこともわかる。

さらに、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の終了後の振り返りの記述の内容を精査していく。

重視する気づきが価値の場合には、ほとんどの事例で、創造的な思考の基盤となる力のうち、ギャップの探究力と他者の把握力が育成されていることがわかる。重視する気づきがつながりである場合には、創造的な思考の基盤となる力のうち、特定の力に限定されることなく育成されていることがわかる。

生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の終了後の振り返りの記述のうち、多くの創造的な思考の基

盤となる力が育成されている事例は、次の三つである。それぞれの事例の記述に見られる創造的な思考の基盤となる力を、想定外への対応力は波線で、ギャップの探究力は二重線で、ニーズの発見力は破線で、他者の把握力は直線で、知識の活用力は点線で表す。

第一の事例では、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動で使用する主な材料は、ひもであった。生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の開始時に重視する気づきは、つながりであった。それに対して、活動の終了後に重視する気づきは、価値になった。

わらしべ活動を通して、まずコミュニケーション能力の大切さを知った…ただのひもに他人が欲しいを思うだけの価値をつけるのはとても難しかった。…次に僕は人との関わり大切さを身にしみて痛感した。…その人その人によって物に対する価値観には大きな差がある事を実感した。また、物の価値自体もちょっとした事で高まるという事も分かった。資本主義社会とはなんなのか…生産という活動は物に付加価値をつけるということと同義であり、それは一個人であっても生活の中で自然にやっていることであり、技術的に言うならば生活をよりよくするという観点で全ての児童生徒が身につけているはずの能力だからである。

わらしべ活動では、単なる紐から最終的に価値のあるものに交換することができたように、創造力を働かせることに、手を加え工夫することの重要性を改めて学ぶことができた。…交換する側とされる側お互いが納得するような交換にできるように意思疎通することが必要条件であり、そういった話し合いを繰り返し行うことで、コミュニケーション能力の重要性を改めて学ぶことができた。

これらの記述から、全ての社会に働きかける力の中核である創造的な思考の基盤となる力が、育成されている姿がわかる。

第二の事例では、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動で使用する主な材料は、綿棒であった。生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の開始時に重視する気づきは、交換・加工するものであった。それに対して、活動の終了後に重視する気づきは、価値になった。

綿棒は 200 本で 100 円くらいであり、8 人で分割すると一人当たり約 13 円であったそこから交換をスタートしてみんな最初以上の価値のあるものをどんどん手に入れていった。…この活動の一番大きな点は「他人の価値観に触れる」ということである。…この授業を通じて人との交流を多くすることができた。…交換してくれたお礼の気持ちとして、交換してくれたひとの部屋の掃除を手伝った。…本来のわらしべでは、必要としている人にものをあげるということを行っていたために、自分も必要としている人にあげなければならないと考えた。そのために温泉に行き、交換したことに関しては、自分なりにとても良かったと考えた。…今回経験した貴重な時間を無駄にしないようにするために、自分はどうか行動していけば良いだろうか、どう生きていけば良いだろうかとも考えさせられた。…

これらの記述から、社会に働きかける力の中核である創造的な思考の基盤となる力のうち、想定外への対応力、ギャップの探究力、ニーズの発見力、他者の把握力が育成されている姿がわかる。

第三の事例では、生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動で使用する主な材料は、紙コップであった。生活科教材「わらしべ○○になろう」の活動の開始時に重視する気づきは、交換・加工するものであった。それに対して、活動の終了後に重視する気づきは、価値になった。

…紙コップからロボットになるまではとても大変だった。…私たちににとっては、わらしべの授業を行うために与えられた、ただの紙コップでも、他の人にとっては飲み物を飲むために使う紙コップであったり、スピーカーにしたことによって、飲み物を飲む用途しかなかった紙コップが音楽を聴くために使うスピーカーになったりと、人によって物の価値が変わる…価値観とは必要性であったり、自分の娯楽用として楽しむためであったりと人によって様々であり、交換が上手く成立した要因としては、価値観が一致したかどうかによると思う。…人と出会い、会話し、交流し、体験するということは児童にとっても私たちにとっても、貴重な体験であると思う。…

これらの記述から、社会に働きかける力の中核である創造的な思考の基盤となる力のうち、想定外への対応力、ギャップの探究力、ニーズの発見力、他者の把握力が育成されている姿がわかる。

6. 結語

本小論では、生活科教材「わらしべ○○になろう」を活用する授業の実践の分析を通じて、生活科における社会に働きかける力の育成を目指す教材の可能性を考究してきた。

本小論を通じて、次の二つが明らかになった。

すなわち、第一に、生活科における創造的な思考を促す活動を通じて、社会に働きかける力の育成の過程に、気づきの変容が起こることである。

創造的な思考を促す活動の開始時と終了後で、重視する気づきの変容に、一定の原理が見られる。具体的には、全体として、創造的な思考を促す活動の開始時に重視する気づきが、つながり、目指す変化、交換・加工するものから、終了後に価値、つながり、交流へと移行する。活動の開始時に重視する気づきがいずれであっても、活動の終了後に重視する気づきは、価値に移行していく。さらに、活動の開始時に価値への気づきを重視する場合には、活動の終了後もほとんどの事例で価値を重視している。

第二に、生活科における創造的な思考を促す活動は、創造的な思考の基盤となる力、とりわけギャップの探究力と他者の把握力の育成に有効であることである。

重視する気づきが価値の場合には、複数の創造的な思考の基盤となる力が育成されている。そのほとんどは、ギャップの探究力と他者の把握力が育成されている。重視する気づきがつながりの場合には、特定の力に限定されることなく育成されている。重視する気づきが交流の場合は、創造的な思考の基盤となる力の育成にはあまりつながっていない。

本小論の成果をもとに、図1、図2の通り、社会に働きかける力の中核となる創造的な思考の基盤となる力の育成の過程の図式化を試みる。

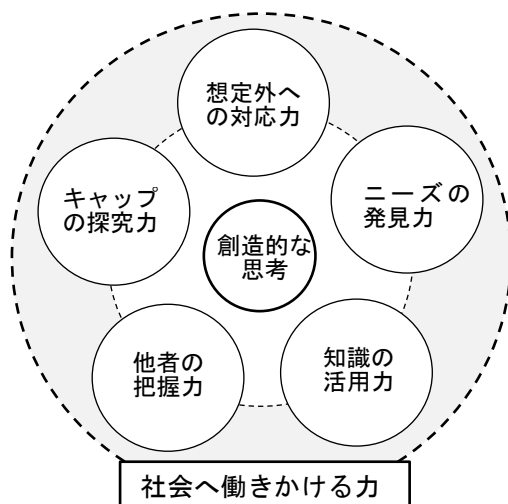


図1 生活科の活動前の創造的な思考の状態

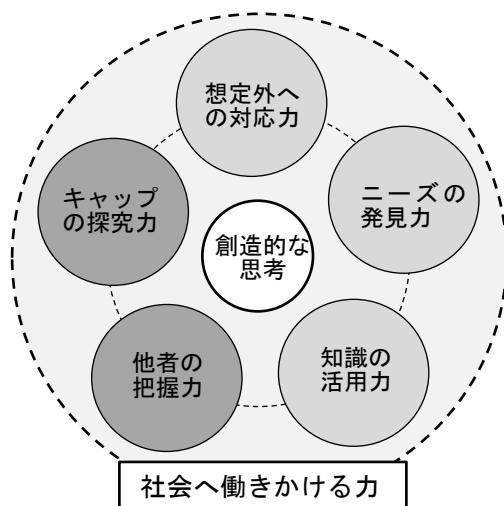


図2 生活科の活動後の創造的な思考の変容

図1、図2の通り、創造的な思考を促す活動を通じて、社会に働きかける力の内実は明確化される。

創造的な思考を促す活動を通じて、社会へ働きかける力の育成の過程で、図1から図2へと、五つの創造的な思考の基盤となる力が獲得される。創造的な思考がなされている状態とは、このような変容が起こることである。このことによって、より一層、社会へ働き

かける力の内実を充実させ、社会へ働きかける力の基礎の育成を可能にすると考ええる。

子どもの出会う社会や生活経験の質的な変容のもとで、生活科の活動や経験を通じて、様々な未知の生活事象への気づきを、既知のものにすることは重要である。それ以上に、今後は、これらの生活事象への気づきから、多様な人々と価値を見出し、対話し、交流することに大きな意味がある。

本小論では、生活科における創造的な思考を促す活動を通じて、様々な生活事象への気づきから、創造的な思考の基盤となる力に変容をもたらし、社会に働きかける力の基礎の育成を図った。その際、多様な人々の価値への気づきは、他者の価値の違いや、他者のものの見方や認識の把握に大きな鍵を握っている。

このような活動を通じて促される創造的な思考には、企業家精神の基本的な思想と共通する特徴が見られた。このことは、生活科のここにある身近な生活から、社会科の描かれた社会へと架橋するために、子どもの気づきこそが、大きな役割を担うことの証左でもある。従って、生活科における子どもの創造的な思考は、身近な人々、社会及び自然と自分との関わり合いの中で、より良い未来を創造し、大きく世界を変える行動の基礎につながると考える。

[注]

- 1) P. F. ドラッカー著、上田惇生編訳『イノベーションと企業家精神【エッセンシャル版】』ダイヤモンド社、2015年、p. 4.
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領』2017年。
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf) (visit; 2017年9月30日)
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』2017年、pp. 8-22.
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/19/1387017_6_1.pdf) (visit; 2017年9月30日) なお、久野弘幸編著『平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理 生活』東洋館出版社、2017年を参考にした。
- 4) 生活科における社会と自分との関わりの活動に関する研究は、次の通りである。
 - ・木村光男「生活科において直接体験を基盤に学ぶ意義—一人・自然・社会との関わりを通して—」常葉大学教育学部『常葉大学教育学部紀要』第37号、2017年、pp. 85-95.
 - ・加納誠司「社会的な見方・考え方につながる生活科の実践的研究—空間・愛着・自己実現を手がか

- りにー」愛知教育大学『愛知教育大学研究報告教育科学編』第65輯，2016年，pp. 17-24.
- ・峯岸由治「社会的物質代謝を視点とする生活科授業構成の性格—小2生活科授業実践『ぶどうものがたり』を手がかりに—」社会系教科教育学会『社会系教科教育研究』第24号，2012年，pp. 1-10.
 - ・峯岸由治「生活科授業実践の新動向—社会的物質代謝を視点とした授業実践を手がかりに—」『教育学論究』第5号，2013年，関西学院大学教育学会，pp. 125-137.
- 5) 木村光男，同論文，pp. 85-86.
 - 6) 木村光男，同論文，p. 94.
 - 7) 加納誠司，前掲論文，p. 17.
 - 8) 加納誠司，前掲論文，p. 24.
 - 9) 峯岸由治「社会的物質代謝を視点とする生活科授業構成の性格—小2生活科授業実践『ぶどうものがたり』を手がかりに—」，前掲論文，p. 1.
 - 10) 峯岸由治「社会的物質代謝を視点とする生活科授業構成の性格—小2生活科授業実践『ぶどうものがたり』を手がかりに—」，前掲論文，pp. 8-9.
 - 11) 有田和正『授業づくりの技術③ 生活科授業づくりの技術』教育出版株式会社，1997年，pp. 111-116.
 - 12) 須本良夫「社会力を育成する生活科授業—第1学年『すなであそぼう』の実践から—」広島大学『研究紀要』平成12年度，2001年，pp. 79-83.
 - 13) 須本良夫，同論文，p. 79.
 - 14) 門脇厚司『子どもの社会力』岩波書店，1999年，pp. 62-63.
 - 15) 須本良夫，前掲論文，p. 79.
 - 16) 須本良夫，前掲論文，pp. 82-83.
 - 17) 坂口淳，呑海信雄，佐々木博昭，立山千草「子どもの生活環境と創造力に関する研究—全国1243名を対象としたインターネットアンケート調査結果—」新潟県立大学『県立新潟女子短期大学研究紀要』Vol. 43，2006年，pp. 1-9.
 - 18) 坂口淳，呑海信雄，佐々木博昭，立山千草，同論文，pp. 5-6.
 - 19) 坂口淳，呑海信雄，佐々木博昭，立山千草，同論文。
 - 20) 小泉令三，山田洋平，大坪靖直『教師のための社会性と情動の学習（SEL-8T）—人との豊かなかわりを築く14のテーマ—』ミネルヴァ書房，2017年。
 - 21) 同書，p. 4.
 - 22) シーリグ，ティナ著，高遠裕子訳『20歳のときに知っておきたかったこと—スタンフォード大学集中講義—』阪急コミュニケーションズ，2010年。
 - ・シーリグ，ティナ著『ティナ・シーリグのスタンフォード大学白熱教室』宝島社，2011年。
 - 23) シーリグ，ティナ著，高遠裕子訳，同書，pp. 10-24.
 - ・シーリグ，ティナ著，同書，pp. 12-30.
 - 24) シーリグ，ティナ著，高遠裕子訳，同書。シーリグ，ティナ著，同書。
 - 25) シーリグ，ティナ著，高遠裕子訳，同書，p. 14.
 - 26) シーリグ，ティナ著，高遠裕子訳，同書，pp. 17-18.
 - 27) 川内彩友美『まんが日本昔話⑩いっすんぼうし・わらしべ長者』講談社，2010年，pp. 22-41.
 - 28) シーリグ，ティナ著，高遠裕子訳，前掲書，pp. 10-24.
 - ・シーリグ，ティナ著，前掲書，pp. 12-30.
 - 29) レダー，ミミ監督『ペイ・フォワード』ワーナー・ブロス・ピクチャーズ，2000年。（DVD）
 - 30) 社会科における企業家精神の育成に関する代表的な研究は，次の通りである。
 - ・山根栄次「社会科と総合的な学習の時間における起業家教育の意義と方法」三重大学『三重大学教育学部研究紀要 教育科学』第54巻，2003年，pp. 1-12.
 - ・山根栄次「中学校社会科経済学習への起業家教育教材導入の意味」愛知教育大学地域社会システム講座『社会科学論集』第42巻，第43巻，2005年，pp. 31-45.
 - 31) ドラッカー，P. F. 著，上田惇生編訳，前掲書，p. 3.
 - 32) ドラッカー，P. F. 著，上田惇生編訳，前掲書，p. 3.
 - 33) ドラッカー，P. F. 著，上田惇生編訳，前掲書，p. 4.
 - 34) シュンペーター，J. A. 著，塩野谷祐一，中山伊知郎，東畑一訳『経済発展の理論—企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究—（上）』岩波書店，1977年，pp. 171-180.
 - 35) 丹羽清『イノベーション実践論』東京大学出版会，2010年，p. 2.
 - 36) 同書。
 - 37) ドラッカー，P. F. 著，上田惇生編訳，前掲書，pp. 7-13.

謝辞

生活科教材「わらしべ〇〇になろう」を活用する授業は，これまで，静岡大学内外の多くの方々のご協力のおかげで実践することができた。特に，学生の振り返りから，静岡大学教育学部の教職員の皆様の温かいご支援の姿が，そこにはいつもあった。多様な人々との会話や交流が，教員を目指す学生に豊かな生活への気づきをもたらし，社会に働きかける力が高まった。この場をお借りして，心より御礼申し上げる。